

〈敬語法一発理解〉

チャプター① 敬語の基礎

【前提】敬語の学習

- ① 理解 ↓ 敬意の方向
- ② 暗記 ↓ 敬語動詞の用法

【一】敬語基礎

① 尊敬語

・動作を行っている人への敬意。（主体への敬意）

(例) 少将、大納言へのたまふ<sup>尊</sup>に、

② 謙讓語

・動作を受けている人への敬意。（客体への敬意）

※「へりくだる」と考えないこと。

(例) 少将、大納言に申す<sup>謙</sup>に、

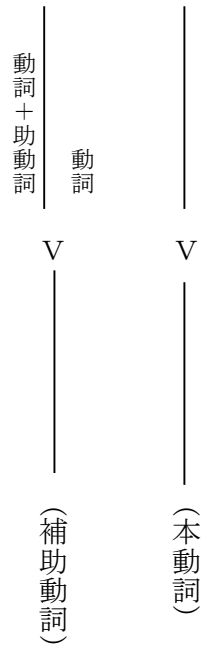
③ 丁寧語

・聞き手、読み手へ対する敬意。（読み手／聞き手への敬意）

(例) 少将、大納言に言ひは<sup>丁寧</sup>べり。

(例) 少将、「ここに書は<sup>丁寧</sup>べり」と大納言に言ふ。

【二】本動詞／補助動詞



※補助動詞の訳

- V 尊敬 「Vなさる」
- V 謙讓 「V申し上げる」
- V 丁寧 「Vです」「Vます」「Vございます」

問 次の傍線部の敬語は本動詞か補助動詞か答えよ。

- 1、かぐや姫、衣を給<sup>ふ</sup>。 〈 〉
- 2、かぐや姫、泣き給<sup>ふ</sup>。 〈 〉
- 3、かぐや姫、泣かせ給<sup>ふ</sup>。 〈 〉

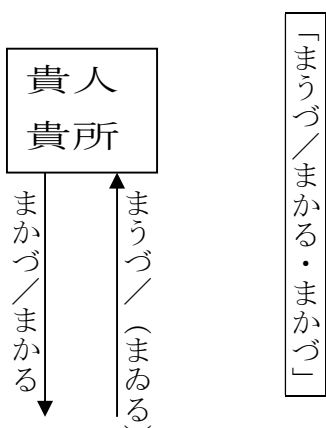
チャプター② 敬語動詞

★ 尊敬動詞

敬語動詞	訳	もとの動詞
たまはす	くださる	与ふ
いますがり	いらつしやる	あり
おはす	いらつしやる	あり・来・行く
おはします	おつしやる	言ふ
のたまふ	お思いになる	思ふ
のたまはす	①お聞きになる ②召し上がる ③お治めになる	聞く・飲む・食ふ・治む
おぼす	①知つていられる ②お治めになる	
おもほす		
おぼしめす		
聞こしめす		
しろしめす		
召す	①お呼びになる ②ご覧になる ③「食う・乗る・着る」の尊敬	呼ぶ 見る ※各
大殿籠もる	お休みになる	寝
つかはす	おやりになる	派遣す
あそばす	なさる	す・なす
ご覧す	ご覧になる	見る
仰す	おつしやる	言ふ

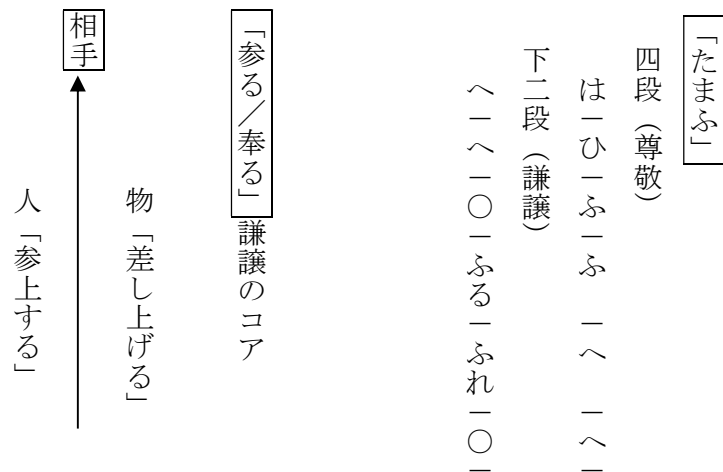
★ 謙讓動詞

謙讓動詞	訳	もとの動詞
申す	申し上げる	言ふ
聞こゆ	①申しあげる ②手紙を差し上げる	言ふ
聞こえさす	いただく	受く
賜はる	①いただく ②お聞きする	受く 聞く
承る <small>うけたまはる</small>	差し上げる	与ふ
参らす	①参上する ②参拝する	行く
まうづ	①退出する (※参上する)	行く
まかづ	お仕え申し上げる	来 行く
まかる	※代動詞	来 行く
つかうまつる	天皇に申し上げる	仕ふ
奏す	天皇に申し上げる	※天皇が客体時のみ
啓す	皇后・皇太子に申し上げる	※天皇の家族が客体時のみ



★ 二種の用法がある動詞

動詞	訳	備考
給ふ (たうぶ) (たぶ)	【尊敬】 ① お与えになる(与ふ) 【謙讓】 ↓補助動詞のみ ① ～しております ② ～させていただく ※「ます」でも可	四段↓尊敬 下二段↓謙讓 ↓終止・命令なし ※謙讓になる条件 ① 会話文/手紙文 ② 主語が一人称 ③ 心情・知覚動詞につく
参る	【謙讓】 ① 参上する(来) ② 差し上げる(す) 【尊敬】 ① 召し上がる(食ふ)	※基本は謙讓 ※衣・食・乗 ← 「尊敬」と覚える
奉る (たぐまう)	【謙讓】 ① 差し上げる(与ふ) 【尊敬】 ① 着られる(着る) ② 召し上がる(食ふ) ③ お乗りになる(乗る)	※基本は丁寧語 ※偉い人の御前↓謙讓
はべり さうらふ さぶらふ	【丁寧】 ① あります(あり) ② おります(をり) ～です。～ます 【謙讓】 お仕え申しあげる(仕ふ) (お控え申し上げる)	



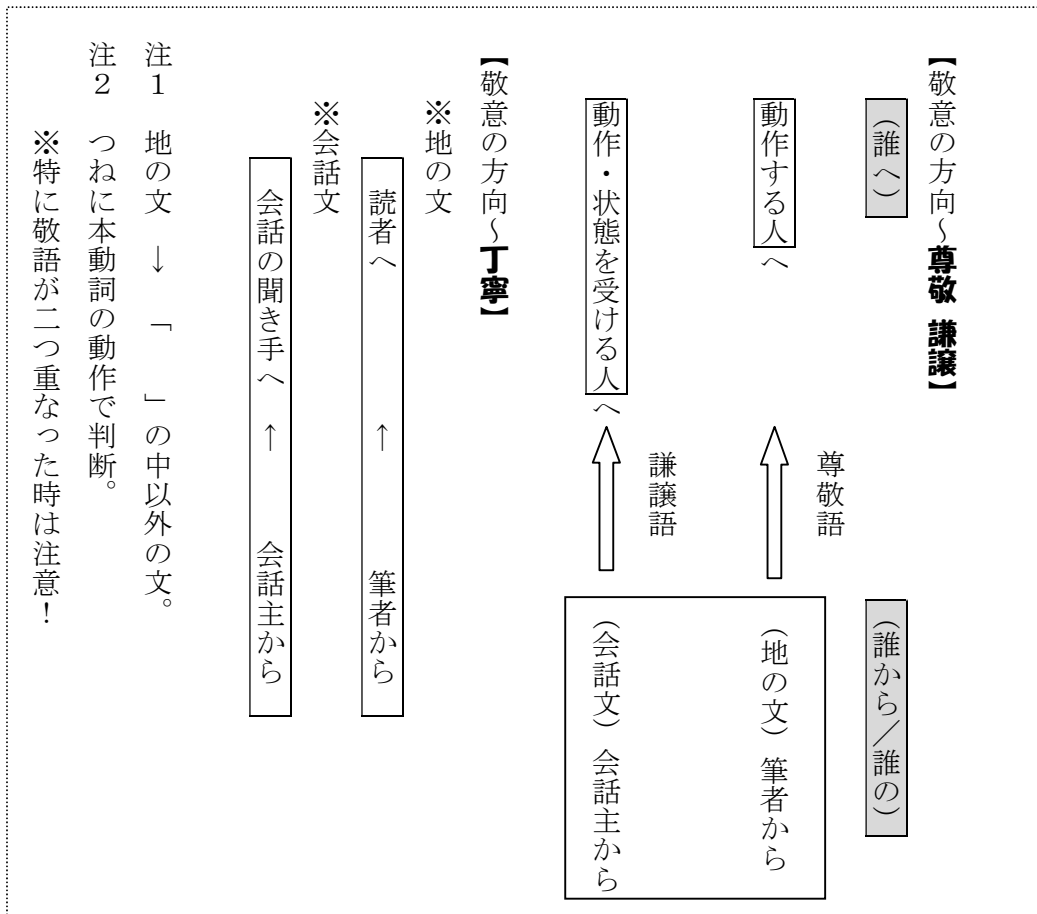
問 傍線部内の敬語動詞の種類（尊敬・謙譲・丁寧）を答えて、

傍線部を訳せ。

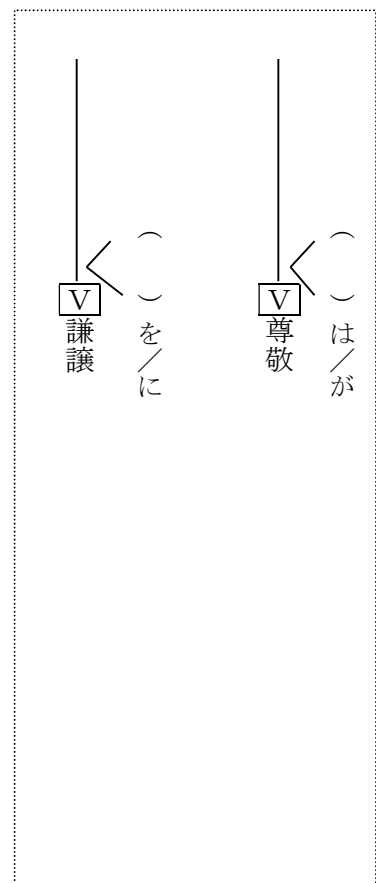
- ① 親王、例の狩りしにおはしけり。
- ② 昔、二条の後に仕うまつる男ありけり。
- ③ ここに木がはべり。
- ④ 夜に入り内裏に参りて、つとめてまかでぬ。
- ⑤ かぐや姫、いといたく泣き給ふ
- ⑥ かぐや姫、帝に御文奉りたまふ。
- ⑦ 宮の御前にさぶらふ人々
- ⑧ 朝のものを参りて、
- ⑨ 南殿の桜、いとあはれに思ひたまへて、
- ⑩ 東宮も御直衣たてまつりなどして、

# キャラクター③ 敬語の方向

## 【一】敬意の方向



## 【二】敬意の方向秒殺技



問 傍線部の敬語動詞の種類（尊敬・謙讓・丁寧）を答えて、傍線部の敬意の方向を答えよ。

（例） 帝、衣、たまふ。

尊敬（筆者から帝へ）

① 翁、皇子に会ひ奉る。

② 宮、はやう大殿ごもりたり。

③ かかるほどに（皇子の従者）、門をたたきて、「くらもちの皇子おはしたり」と告ぐ。

( )

( )

④ 二人して詠み候ふ。

( )

( )

⑤ （光源氏は）まづ内裏に<sup>a</sup>参り<sup>b</sup>たまひて、日ごろの御物語など（帝に）<sup>c</sup>聞こえたまふ。

a

( )

( )

b

( )

( )

c

( )

( )

⑥ （蔵人が大臣に）「宮は院よりまた御衣<sup>a</sup>たまはり<sup>b</sup>給ひ候ひけり」と<sup>d</sup>聞こえ<sup>e</sup>たまふ。

a

( )

( )

b

( )

( )

c

( )

( )

d

( )

( )

e

( )

( )